



<当会のホームページ>

<https://www.furusatotaishi.com>

■ 本会のシンボルマークは、大使同士の情報交換及び、その委嘱者との相互交流を主眼に図案化。4つのモチーフからなり、山（緑色／地方・故郷・自然）と矩形（青色／都会・テクノロジー）と円及び輪（黄、橙／人・情報・ネットワーク）を表現。

HEAD LINE

【1～2面】

ニューノーマル時代に始めたいもの、残したいもの

——平谷 英明

【2～3面】

地域の魅力を発信！

筑西市 地域おこし協力隊の挑戦

——谷島 直哉

——高橋 俊介

【4～5面】

ポストコロナ時代に地方紙に期待される役割
高知新聞社代表取締役社長

——中平 雅彦

【6～9面】

人手不足をキッカケに関係人口を創出する
「おてつたび」

株式会社おてつたび代表取締役CEO

——永岡 里菜

【8～9面】

コロナ禍で変わったもの

【10～11面】

ふるさと喜界島の紹介！

——友岡 照美

【12面】

旅を詠む (五) 歌詠み人 鉦谷君子の旅紀行

——鉦谷 君子

地域ツアーの思い出～ミニツアー後の酒田～

——鴨川 キヨ

【13面】

福島県浜通り視察ツアーの思い出

——伊藤美智子

新会員のひと言

——立目 浩文

【14面】

事務局より
全国ふるさと大使連絡会議の概要
編集後記 他

ニューノーマル時代に 始めたいもの、残したいもの

コロナ禍での3度目の春の訪れで、梅は芳香を放ち、桜は美しい花を開くのに、我々の不自由な日常は相変わらずで、さらに、2月末から続くウクライナ情勢の行方も気掛りなところで、杜甫（唐時代の詩人）の「国破れて山河在り 城春にして草木深し---」（春望の冒頭の対句）を思い出す昨今です。

それでも、不思議なものでコロナ禍も2年もたちますと、不自由な日常にも慣れ、リモートワーク、Zoom会議など新しいスタイルにもなじんできました。しかし、一方で三密となる集会、地域の集まりやお祭り、飲み会などの延期、中止が続いて、このままではなくなってしまうのではないかと危惧されるものも出てきました。

いずれコロナ禍は終息あるいは安定的に対処しうるものとなり、平穏な日常に戻ると思われますが、コロナ禍で変化したものの中には、もはや従前には戻らないものも数多くあると思われます。一方、新しく芽生えた動きでその後も新たな潮流となると思われるものも各地で見られるようになってきました。

こうしたコロナ禍で変化したビジネススタイル、生活様式などがコロナ後も継続し、新たな基準、日常となり、もはや昔の日常に戻れない『ニューノーマル』と呼ばれる時代が来ると見込まれます。

そんな時代に、地域おこしにとって大切なものは何かについて考えてみたいと思います。

まず、何とか残したいものの1つに、従来地域コミュニティが有していた防災力、防犯力があります。

津波襲来の際の避難弱者を近隣住民が助けて避難する訓練、振り込め詐欺の情報共有、防犯協会、PTAなどが地域を巡回していた活動などで、ここ2年間は十分に行われていないと思われます。そこで、コロナ後はできるだけ速やかな再開が望まれます。

次は、地域の集まりや祭りなどですが、なかにはコロナ禍による中断で、再開のための資金集めや人集めに主催者や担い手が苦労される場合があるかもしれません。

既にコロナ禍以前から集まりや祭りの中心的担い手となる若者の減少や資金難で存続が危ぶまれていたものがあり、コロナ禍の中断を機に廃止の動きが一気に加速する恐れがあります。再開のために努力している主催者、担い手を励ましたり、支援したりするシステムが必要となると思われます。

逆に、各地で始まった新しい事業もあります。例えば、リモートワークが普及してきたことに伴い、仕事の拠点を東京以外の首都圏に置いたり、山梨県、長野県などに移住して仕事を始めたりするといった事例です。

なかには、リモートワークの特性である勤務時間にとらわれないという利点を生かして、従業員の子育てや介護などのライフスタイルに併せて柔軟に働き方、働く時間を選べる制度を採用し業績を拡大している企業もあります。



また、Zoom会議も一般的となり、国内外の遠隔地の研究者などとも意見の交換ができるようになりました。

このような新しい動きはコロナ後にも残り、復活した従来のリアルな会議、フェイス トゥ フェイスの情報交換と併せて、リモート、リアル双方の利点を活用していく時代となると思われます。

このような新しい動きを加速させていくために、PCやスマートフォンの普及、PCイリテラシーを無くするためのPC研修、行政保有のデータを幅広い活用を目指して広くオープンにするオープンデータ政策*の積極的な推進が何より必要と思われます。

また最近政府が提唱しているデジタル田園都市構想にも、情報の地域間格差を解消するためのオープンデータ政策の推進が何より必要と思われます。

ニューノーマルの時代には、再生、新生などの動きを支援したり、鼓舞したりすることが何より大切と思われます。（代表 平谷 英明）

*オープンデータ政策とは

オープンデータ政策とは、納税者の経費で既に収集されている行政情報を社会（特にビジネス界、大学、市民社会組織など）の他のアクターがアクセスでき、再使用ができるようにする政策です。

先進諸国では、既に、オープンデータ政策がデータ提供の費用を上回る直接の利益に加え、より長期的には、技術革新、特に中小規模の企業の技術革新を後押しするとの認識のもとで、その推進に拍車がかかっています。

英国におけるオープンデータの活用事例として次のようなものがあります。

ロンドンのバスのリアルタイムの情報が外部のプログラマーにもアクセスできるようになったおかげで、最寄りのバス停へのバスの到着予定時刻を顧客の携帯電話のアプリへ通知できるようになりました。このサービスは、雨などの悪天候の際や屋根の無いバス停の場合に大いに役に立ちます。

また行政情報ではありませんが、マイクロブログのツイッターに関して『センチメント分析手法（株式市場や金融市場で潮目の変化が明らかになる前に、ターニングポイントを見つける分析手法）』を応用して、情報機関がテロリストのツイッターの増加から安全を脅かす兆候を事前に察知するように努めています。

マンチェスター市警は、フェイスブックで「暴徒と化しうる」チャットをモニターしていましたが、2011年8月に暴徒化の準備がととのった「熟したイチゴ状態（ブラックベリー）」になったと判断したので、彼らの使っているネットワークを通じて、その企てをくじく広報を流し、鎮静化することに成功しました。

わが国では、静岡県が地震関連情報をオープンデータ化し、学者、研究者の地震研究の利便に供しました。これにより、地震のメカニズム研究、避難などの行動研究が進んだほか、従来情報公開の手続きに要していた手間と、時間の節約につながったと高く評価されています。

地域の
魅力を
発信！

筑西市

筑西市では現在2名が、移住者ならではの視点から、地域の新しい魅力を発掘し、広める「地域おこし協力隊」として活動しています。

谷島 直哉 隊員

筑西市の隣町の桜川市出身で、筑西市（旧下館市）の高校を卒業後、進学のために上京し就職。2020年10月に筑西市地域おこし協力隊としてJターンしました。

◆心と体に効果あり、自転車の可能性

私の活動テーマは「自転車を活用した地域の活性化」です。欧州の研究では自転車が心と体の健康に優れた効果があることが報告されています。私も腰痛・首痛が治るなど、身をもって恩恵にあずかっています。車社会の時代に、微力ながら自転車利用の機運が高まるよう働いています。

これまで、自転車利用環境整備として、自転車サポートステーションの普及、自転車ラックの製作と設置に力をいれました。また、サイクルツーリズム推進として、自転車ツアー催行、サイクリングルートの作成と発信、SNSで立ち寄りスポットについての情報発信



◀ Chikusei Bicycle



Instagram ▶

地域おこし協力隊の挑戦



を行っています。その他にも市で運営しているコミュニティサイクル（シェアサイクル）のプロモーション活動を行いました。

◆自転車を使った地域活性化

今後は自転車ツアーの企画とガイドとしての仕事、さらに、市内を自転車で楽しく回遊しながら、商店・飲食店への立ち寄りを促し、少しでも地域経済に貢献できるような催しもできればと考えています。

しかしながら、自転車利用の機運はまだまです。私の活動や自転車ラック設置、自転車サポートステーション、サイクリングツアーなど、何でも結構ですので、ご興味がありましたら、jitensyayajima.com よりご連絡いただけますと幸いです。

おすすめスポットや自転車ツアーの情報などは、私のウェブサイト（Chikusei Bicycle）やInstagramにて発信しておりますので、ぜひご覧ください。

高橋 俊介 隊員

皆さんこんにちは。筑西市地域おこし協力隊として2021年1月から活動しています。赴任してから、地元の皆さんに繰り返し聞かれたのは「どうして筑西市で協力隊をやることを選んだの?」ということでした。

◆筑西市は梨の名産地

私は完全なIターンです。筑西市には縁もゆかりもありません。ではなぜ筑西市で協力隊として活動しようかと思ったかというと、理由は筑西市の名産である「梨」でした。

以前、私はテレビなどの映像の仕事をしていました。その時にニュース取材で訪れた梨農家で、大量の梨が廃棄されるのを目の当たりにしました。小さな傷や、大きさの不揃い（小さすぎたり、大きすぎたり）、蜜症（果肉が透明になり食感が変わってしまう病気）にかかってしまうなど、ほとんどが味には全く問題ない理由で廃棄されていました。

この廃棄をなくして尚且つ仕事にすることができれば、自分がその土地で活動する意味があるのではないかと考えたことが、私が梨の産地である筑西市で協力隊になることを選んだ理由です。

◆砂糖・防腐剤無添加、100%梨で作った生ジャム「梨の蜜」

2021年の夏は、この「梨の蜜」の試作に全力を注ぎました。毎日10時間、一生でこんなに梨の皮をむいたことはありません。今年の夏には商品として、皆さんにお届けできると思います。試作をするにあたって、農家の方から梨を提供していただきました。農家の方には感謝しかありません。



完成した「梨の蜜」

◆「梨の蜜」専用加工場確保、2022年の本格稼働を目指す

Iターンで土地勘のない私には、ある意味一番厳しかった作業が、「梨の蜜」を製造するための専用の加工場探しでした。市内をくまなく歩き、めぼしい建物を見つけては一軒一軒、話を聞いて回りました。無事、専用の加工場が確保できたので、本格稼働を目指して整備を進めています。

活動を始めてあっという間に1年が過ぎました。地域おこし協力隊の任期もあと2年です。この1年もっとできたことがあったのではないかとありますが、焦りは禁物。2年目は「梨の蜜」を始め、筑西市の産物を使った商品開発・販売をより広げたいと思っています。



ポストコロナ時代に地方紙に期待される役割

ウィズコロナ、ポストコロナ時代には地方紙の役割は貴重なものになると思われます。

すなわち、人々を励まし、困難な状況にある人々に光を当て、新しく生まれた芽を鼓舞するということが期待されます。

そんな地方紙のありかたについて、高知新聞社代表取締役社長の中平雅彦さんとメール対談を行ないました。

平谷：コロナ禍もいったん収束するかにみえたのですが、またオミクロン株の流行でなかなか出口が見えません。しかし、いずれ収束するでしょう。そこで今日は、ウィズコロナ、ポストコロナの時代に、地方紙に期待される役割についてお話を伺えればと思います。メール対談のお相手は、私が自治省（現総務省）時代の平成元年から5年まで赴任していた高知県の地元紙、高知新聞社の中平雅彦さんです。よろしくお願いします。



中平：平谷さん、お久しぶりです。よろしくお願いします。

平谷：まず、コロナ禍で変わったことについて聞かせてください。

中平：はい。平谷さんもよくご存じのように、高知は酒文化の土地です。観光客にも人気の「ひろめ市場」には、平屋の大きな建物の中に飲食店や土産物店など約70の店が入っています。商店街の一角にあり、近くには高校もあります。昼間からおじさんがビールを飲んでいる、その横のテーブルで高校生が談笑している。そんな老若男女が楽しめる



スポットです。しかし、コロナ禍でしばしば営業が制約され、かつての賑わいには程遠い状態です。

平谷：夜の街はどうですか？

中平：高知では複数人数での飲み会のことを「お客」と呼びます。お客のときは、杯を差しつ差されつ交換する「献杯」が酒文化の一つですが、さすがに感染防止の観点から一切見かけなくなりました。罰ゲームでお酒を飲む、お座敷遊びもいまはお休みの状態です。

平谷：全国でお祭りやイベントが中止を余儀なくされていますね。

中平：はい。高知の夏といえば8月の「よさこい祭り」です。高知市内の9カ所の競演場と7カ所の演舞場で趣向を凝らした約200チーム、2万人が演舞を繰り広げます。4日間で100万人の人出があり、経済波及効果は100億円とも言われます。それが2020年、21年と中止になったショックは計り知れません。他県のお祭りもそうでしょうが、祭りのために一年働くという人も少なくありません。よさこい好きが高じて高知に移住した人が何人もいるほどです。今年の夏こそはと願っています。

平谷：コロナ禍の中で、地元新聞社としてどんなことに取り組まれましたか？

中平：きめ細かな報道はもちろんですが、観光立県・高知を支える飲食店や、アウトドアの体験型観光業者を支援しようと、クラウドファンディングを利用したキャンペーンを実施しました。土佐弁で「あしたの分も買（こ）うちよきね。」プロジェクトと銘打ち、飲食券やチケットを先買いすることで資金繰りに苦慮する事業者を応援する狙いです。20年5月から始めた飲食店対象の第一弾には1カ月間で総額3,250万円、体験型観光業者を応援する第二弾には560万円の支援が集まりました。他県の地元新聞社でもさまざまな支援の取り組みを実施したと聞いています。

平谷：報道の面で気遣ったことは？

中平：感染拡大の初期、県内初の感染者とその職場に対し、ネット上でデマや誹謗中傷があふれました。本紙は勤務先の了解を得て、デマを打ち消す記事を載せました。またクラスター（感染者集団）が発生した施設を激励する動きを取り上げたり、地元の専門医の呼び掛けを繰り返し掲載したり、当然のことですが手厚く報じています。年配の方々は情報入手手段がテレビや新聞と限られている人が多いですから。子どもへのワクチン接種が始まった今は、若い保護者の疑問に答える内容を紙面だけでなくウェブでも展開しています。

平谷：コロナ禍を機にリモートワーク、ズーム会議などの動きが広がっています。まだ大都市圏にとどまっているようですが、「デジタル田園都市構想」の動きもあり、今後地方に展開していくように思われますが、いかがでしょうか？

中平：私自身、東京での会議はウェブとリアルが半々という感じです。東京出張が多い人はズーム会議も多いようですが、県内でのリモートワークはさほど広がっていないように思います。コロナ禍の影響とは直接関係はないのですが、高知をアニメクリエイターの聖地にしようというプロジェクトが動き始めました。アニメの聖地というと、荒唐無稽と思われるかもしれませんが、クリエイターが育つ素地はあります。高知は横山隆一さんをはじめ、やなせたかしさんら漫画の大御所を輩出した県です。高校生がアイデアと筆腕を競う「まんが甲子園」は今年で30年になります。毎年全国から約300校が参加する一大イベントに育ちました。また世界的なフィギアメーカー「海洋堂」のゆかりの地であり、展示や制作の施設もあります。アニメの産業化も夢ではないと思っています。

平谷：今後、パンデミックのほか、地球温暖化に伴うゲリラ豪雨、発生が危惧される南海トラフ地震などへの備えについて政府、自治体も広報していますが、やはり住民の心に残る効果的な広報は地元紙と思われれます。

中平：高知県の歴史は災害との闘いの歴史であったと言っても過言ではありません。本紙は2003年から「高知地震新聞」という1ページ特集を月1回ペースで掲載しており、防災情報には力を入れてきたつもりですが、東日本大震災は私たちの意識を一変させました。宮城県河北新報社の全面協力をいただき、16年から防災キャンペーン「いのぐ塾」を始めました。「いのぐ」とは古い土佐弁で「しのぐ」「生き延びる」という意味です。防災塾の特徴は住民と一緒に考え行動することです。まだ災害に遭っていない「未災地」で防災の実効性を高めるにはリアリティーが重要です。そこで開催地やテーマに応じて被災経験者、語り部を河北新報社に推薦してもらっています。

平谷：河北新報社は高知以外でも地元新聞社と共催して防災塾を開いてきましたね。

中平：私たちが力を入れているのが、次世代の地域防災リーダーを育成する「防災いのぐ記者」制度です。県内の中学生から希望者を募り、1年間活動します。毎月紙面で活動を報告するほか、夏休みには5人程度が被災地を視察します。コロナ禍でリモート方式になっていますが、この5年間で119人の「いのぐ記者」が巣立ちました。これからも「被災地」と「未災地」をつなぐ役割を果たしながら、南海トラフ地震に備えたいと思います。

平谷：今日は貴重なお話をありがとうございました。

高知地震新聞

第3火曜日掲載 高知新聞防災プロジェクト

ひとりでも悩みを抱え込まずに、身近な人や地域の相談窓口にとまらわずに相談してください。

心悩みに関すること

■高知県立精神保健福祉センター■
tel.088-821-4966
[受付時間] 8時30分から17時15分まで(平日)

■高知いのちの電話■
tel.088-824-6300
[受付時間] 9時から21時まで(毎日) 10時から18時まで(休日夜)

SNS相談

LINE・チャットで相談ができます
まらうよう SNS 検索

高知県相談窓口一覧

高知県 悩み 検索

高知県 子ども・福祉政策部 障害保健支援課 tel.088-823-9669 fax.088-823-9260

新型コロナウイルス感染症の影響により収入が減少している方等へのお知らせ

新型コロナウイルス感染症生活困窮者自立支援金

- 支給対象世帯
 - 生活福祉資金特別貸付を借り終わった世帯など
- 申請期限 令和4年3月末(※再支給も同様)

支給条件: 支給期間については、右記特別貸付ホームページ参照
申請条件: コロナウイルス感染症生活困窮者自立支援金をご確認ください。

高知市にお住まいの方	088-855-3386(受付は平日9:00~17:00)
市部にお住まいの方	各市福祉事務所
町村部にお住まいの方	お住まいの町村社会福祉協議会
厚生労働省コールセンター	0120-46-8030(受付は平日9:00~17:00)

高知県地域福祉政策課 TEL 088-823-9090

高知で働く 求人情報

【キューボ】

毎週日曜掲載!

①新卒向けの高い希望額給
②企業求人情報を見やすく掲載
③インターネットでより多くの人に伝える仕組み

[無料]企業求人情報サイトは1日-2日の掲載費(フッターは2日-5日)
[料]15,000円(税別)21,000円(税別)45,000円(税別)96,000円(税別)96,000円(税別)
[お問い合わせ]高知県地域福祉政策課
フッタータイプは別途特別料がかかります。お問合せはお問い合わせください。

<企画> 高知県福祉政策課 ☎088-825-4041

「津波高」と「浸水深」

津波の大きさを伝える際「津波高」と「浸水深」という用語が出てくる。津波高とは津波が起きた際に観測される高さのこと。津波高は、平常時の潮位の高さ(平常時の潮位)と津波高との差を指す。津波高は、平常時の潮位の高さ(平常時の潮位)と津波高との差を指す。津波高は、平常時の潮位の高さ(平常時の潮位)と津波高との差を指す。

津波高は、平常時の潮位の高さ(平常時の潮位)と津波高との差を指す。津波高は、平常時の潮位の高さ(平常時の潮位)と津波高との差を指す。津波高は、平常時の潮位の高さ(平常時の潮位)と津波高との差を指す。

津波高は、平常時の潮位の高さ(平常時の潮位)と津波高との差を指す。津波高は、平常時の潮位の高さ(平常時の潮位)と津波高との差を指す。津波高は、平常時の潮位の高さ(平常時の潮位)と津波高との差を指す。

人手不足をキツカケに 関係人口を創出する

『おてつたび』
とは？

『おてつたび』は、お手伝いと旅を掛け合わせた造語です。地域の短期的・季節的な人手不足で困る収穫時の農家やハイシーズン時の宿泊施設と地域に興味がある方をマッチングし、お手伝いを通じて地域の関係人口（ファン）を創出することを目的としたweb上のサービス（<https://otetsutabi.com/>）です。おてつたびの特徴は、地域の困り事をお手伝いをする事で報酬（アルバイト代）を得ながら旅行が可能のため地域に行く際のポトルネックになりがちな旅費を軽減可能にし、地域の方は地元の方をお願いする費用感（時給850～950円程）で全国の若者に助けを求める事ができる点です。困り事は、季節変動性が高く短期的な人手不足を感じやすい一次産業（農家さんや漁師さん）や観光業（お宿さんや、アクティビティ関連会社さん）が中心ですが、最近はお祭りや新割り、雪かき、海洋プラスチックの回収作業等のユニークな内容も増えており、スキル（ライティングやSNSでの発信等）を活用したおてつたびも出てきています。読んでる皆さんは、「お手伝いって…遊び感覚でこれだけでも困るんだけど…」と思われている方もいるかもしれませんが、弊社には今まで培ってきたノウハウがあり、現在は地域の方も参加者の満足度も非常に高くリピーターが多い実績もあります。

また、おてつたび後に参加した地域と関わりを続けている方（再訪する方、地域のものを買っている方）は全体の6割と非常に高く、そのまま移住・定住した例も出てきています。そんな地域との縁を紡いでいる事がすごく嬉しいなと思いつつ活動しています。私たちの想いとしては、人手不足や関係人口創出という文脈は一社や一人で解決できるほど簡単な課題ではないと認識しているため、JTB様やANA様、JR西様、JAグループ様や自治体・DMO様等とも積極的連携を行いながら、人手不足をキツカケに関係人口創出を目指しています。

株式会社おてつたび

代表取締役CEO 永岡 里菜 (Nagaoka Rina)

〒151-0053

東京都渋谷区代々木3丁目31-12代々木ハイツ1号館606号室

mail:nagaoka@otetsutabi.com

phone:09039306510

HP:<https://otetsutabi.com/>

「おてつたび」



『おてつたび』ができた背景 ～貯金を切り崩して夜行バスで日本を巡る～

おてつたびの概要をまずは説明しましたが、おてつたびは人手不足を解消したくて立ち上げたサービスではありません。自分の出身地である三重県尾鷲市（おわせし）のような、「どこそこ」と言われがちな地域に人が訪れる仕組みを作りファンになって欲しいという想いで立ち上げています。ただ、私自身起業には全く興味が無い人間で、大学生の時は小学校の先生を目指すために教育学部に通っていましたが、教育実習後に自分の無力さを痛感し、「一度は民間企業を出てから教師になった方がいいかもしれない」という気持ちが強くなった結果、大学卒業後は修行の意味でベンチャー企業に就職しました。3



↑おてつたびの様子です。



↑右側が私です。

年間だけ修行をするつもりが、先輩方々に民間企業の楽しさを教えてもらい、その後は教師にはならず2社目へ転職しました。2社目で様々な地域に出張で行く事が多く、その際に自分の出身地である三重県尾鷲市のように一見「どこそこ」と言われがちなのですが、素敵なものを持っている地域が沢山ある事に気がきます。同時に「自分が旅行で行っていた地域は一握りなのでは…?」という事実に気づき、もっと尾鷲市のような「どこそこ」と言われがちな地域の魅力を伝えたい!と感じ自分の人生を地域に捧げると覚悟を決めました。覚悟は決めたものの何をして良いのか全くわからなかったので、自分の退路を断つという意味も込めて26歳の時にサラリーマンを退職し、同時に東京の家も解約して日本各地を夜行バスで巡りながら立ち上げたのが『おてつたび』です。

『おてつたび』ができた背景 ～地域に行く際の2つのハードル～

地域を巡っている中で感じた地域へ行く際のハードルは、二つあると考えました。一つは金銭的ハードルです。色々ヒアリングする中で見えてきた事が「皆さん、日本各地の知らない地域に行きたくない訳ではない」という事実でした。行きたくないわけではないけど、「どこそこ」と言われがちな地域に行く為に旅費交通費が意外とハードルになっている。確かに有名な観光名所がある地域は交通の価格競争が起きやすいのでLCC等で安く行く事ができますが、「どこそこ」と言われがちな地域は意外と旅費が高いため、旅行先として選択肢にあがりにくい…。そこで、『おてつたび』では、お手伝いをする報酬を得られる形にする事で、「どこそこ」と言われがちな地域に行く際のハードルになりがちな旅費交通費を抑える事が出来ればと思いました。

二つ目のハードルは、心理的ハードルです。「どこそこ」と言われがちな地域も素敵なものは沢山持っているのですが、インターネット上だと差別化が難しい事も多く、「海や川、山もあって、食事も美味しく、人も優しいです!」とPRしても他と同じに見えてしまい魅力が伝わりにくい現状があると私は考えています。そのため、旅行先の選択肢としてもあがりにくいです。半年間地域を巡っている中で、私は「どこそこ」と言われがちな地域ほど地域の方との交流を通じて地元の方が知る魅力を教えてもらうのが大切だと感じました。ただ、普通の旅行で歩いている農家さんや地域の方に声を掛けて自然と仲良くなるのは難しいため、お手伝いという共同作業を通じて自然と交流が生まれ地域の魅力を知れる形を作る事ができればと考えました。

私たちは、おてつたびを通じて「まずは、地域に来て」もらい、地域のファンや応援団（関係人口）になってもらう事で、その人を起点にファンが増えていく世界を作りたいと考え運営しています。

『おてつたび』を通じて創りたい世界と コロナ禍での変化

私たちは、有名な観光名所に行くのも絶対に楽しいですし私も大好きですが、「どこそこ」と言われがちな地域に行くのも面白いよね!というカルチャーを創りたいと思い運営しています。実際に、通常の旅行は「知っている地域に行く」傾向が強い中、おてつたびでは約9割の参加者が「知らなかった地域」へ行く傾向にあります。私たちは、「卒業旅行は、旅行に行く?おてつたびに行く?」そんな言葉が当たり前飛び交うように、「どこそこ」と言われがちな地域に行くという事も日常の選択肢の一つになって欲しいと思っています。

また、今後日本が人口減少を辿る未来は避けて通れません。2040年には896の自治体がなくなると言われており、三重県尾鷲市ももちろん消滅可能性都市に入っています。その中で、過疎化や少子高齢化に悩み定住・移住を推進している地域も多いですが、地域に興味があっても仕事やご家庭の都合ですぐに地域へ移住できない方が多い事実もあると思っています。私は、その地域に住まなくても、定期的にお手伝いに行ったり、地域のものを買ったり、地域を訪れ経済をまわしてくれたりするファンや応援団（関係人口）を増やすことによって、一人が一役ではなく、二役・三役になりながら、地域が支え合う未来を作ることが出来ないかと考えています。



なお、新型コロナウイルス発生前後で参加者・地域事業者ともに2倍に急増しており、地域への注目度の高さが伺えます。コロナ前は利用者の70%以上が学生でしたが、コロナ禍では50%が学生以外に変化しており、テレワークをしながらワーケーションのような形での利用者や、60～70歳の方のアクティブシニアの利用も増加しています。場所を問わずに仕事ができるようになった今、自分は何を大切にしていきたいのか価値観を見直す方も増えているように感じます。その一つの選択肢として地域に注目している方も増えているのかなと思いますし、そんな方々が地域と繋がる為に一助におてつたびもなれたらと思っています。

**人手不足で困っている地域の方や
関係人口創出に興味がある方を募集中**

現在、おてつたび先（農家さんやお宿さん）の登録は約600箇所、参加者の登録者数は約1.5万人、おてつたび参加倍率は3～5倍と非常に高くなっています。それくらい地域へ興味を持っている方が増えている事実は嬉しい反面、申し込みをして頂いた全員がおてつたびに参加する事ができない現状に、自分たちの力不足を痛感しています。日本各地の地域の魅力を沢山の方に伝えていきたいと考えていますので、もし周りに人手不足や関係人口創出に興味がある方がいらっしゃる場合は、是非問い合わせフォームよりご連絡いただけると嬉しいです。

コロナ禍で変わったもの

	プレコロナ	ウイズコロナ	ポストコロナ
観光面			
インバウンド（外国人観光客）	急増	激減	ゆっくり戻る
集団旅行から個人旅行への変化	顕在化	より顕著に	拍車がかかる
家族旅行への変化	グランピングなど旅行形態に変化		
モノ消費からコト消費への変化 （爆買い⇒体験）	顕在化	売場の密回避	より顕著に （福袋もモノから体験のチケットなどへ）
オンラインツアー	—	出現	高齢者中心に拍車
オンラインカジノ	（現地型）	出現	現地型との併存
観光スポット	物語性、歌枕	SNS映え	SNS映えが中心に
イベント・アトラクション	盛況	無観客、間引き	戻る

ビジネス面（働き方改革と併せ）			
リモートワーク	試験的	止む無く実施	一部活用
オンライン会議	例外的	止む無く実施	積極的に活用 （遠距離、海外）
時差通勤	試験的	止む無く実施	積極的に活用
生活時間優先の雇用形態の企業	—	出現	一部定着
アバター（遠隔操作ロボット）	試験的	試行的（ホテル案内など）	本格的
ノントッチパネルなど	試行的	実証的（ノントッチ清算）	普及

教育面			
オンライン講義・ゼミ	例外的 （海外の大学と）	止む無く使用	一部活用 （遠距離、海外）

スポーツ面			
観戦	観客、PV	無観客、間引き 映像技術向上	お家観戦増加 映像情報増加
実戦	盛況	自粛、マスクで （剣道のつばぜり合いの制限）	戻るが接触型は？
e-sports	始る	隆盛	隆盛継続

まだまだ未熟な点も多いですが、引き続き日本各地の「どこそこ」と言われがちな地域にも人が訪れファンになってもらう仕組みをチームで作りたいと思っています。応援いただけると嬉しいです。



	プレコロナ	ウイズコロナ	ポストコロナ
エンタメ面			
	萌え (内面)	推し (外面)	推しの継続
	(キャラクター、タレントを推す)		
経済・景気面			
	停滞	沈滞	?
	(失われた30年Lost 3 Decades) スタグフレーション		
政治面			
多極化ポピュリズム	顕在化	より顕著に	今後とも
有言と実行	口先政治	虚偽答弁の常態化	今後とも
	(情報公開、fact checkが必要)		
社会生活			
個人主義の台頭	顕在化 (個食)	個人用グッズ	傾向変わらず
格差社会	格差、分断	格差拡大	社会の分断
	(子供食堂 賽銭泥棒)		
地域活動・コミュニティ	協働を志向	オンラインで	参加者の減少
おうち時間の増加			
Takeout	補完的	必要性増す	積極的活用
出前	補完的	必要性増す	積極的活用
自宅飲み	独り酒	グッズの開発	それなりに楽しむ
飲みニケーション	有用	機会の減少	有用性の低下
食事	孤・個食	一人鍋一人焼肉	今後とも
	ソロキャン (独りキャンプ)		
葬儀	大規模	家族葬小規模	今後とも
	社葬	家族葬+偲ぶ会	今後とも
結婚式	若者のパーティ	ビデオ、Zoon配信	?
その他			
	カラスの跳梁跋扈	カラスの減少	?
	(餌となる都会のごみ減少、オオタカ、ゆりかもめの増加)		
	串揚げやソース共用	個別のソース	共用の復活
	(ソースの2度漬け禁止やで)		
	繁華街のお店	住宅街のお店	両方とも

*この表は、関連文献、マスコミ報道などをベースに編集部が独自に作成したものです

ふるさと喜界島の紹介！

離島と聞くと皆さん沖縄県？と仰るのですが、喜界島は鹿児島県です。奄美大島のすぐ隣にある周囲48kmの小さな島です。喜界島は珊瑚礁が隆起して出来た島で、今でも年に2mmずつ隆起しているのは世界でも類がなく珍しく貴重とされています。また、台風の通り道でもあり珊瑚礁で作られた石垣が今でも台風から大事な家を守っています。一年を通して温暖な気候で、ハイビスカスやブーゲンビリアなど南国の花々を求め沢山の蝶が飛び交う光景はまるで絵本の世界の様です。2000kmを渡る蝶「アサギマダラ」の飛来地でもあります。島に高い山はなく、中央部に広がる標高203mの『百の台公園』。そこから眺めるエメラルドグリーン的大海、東西に太平洋、東シナ海を一望できる景色は奄美十景の一つになっています。『眺めの美しさや 百の台 青い海原見おろせば 夢と希望が湧いてくる』と歌にあるほど美しい眺めです。また、島の人は温かく情けの島として知られています。島の民謡で『喜界やよい島 情けの島よ 可愛いあの娘の情けに惚れて 我等やため息つくばかり 俊寛翁*も高笑い 我等島（ワチャシマ）よい島 我等島よい島 情け島』と歌われています。

美しい風景とゆっくり流れる島時間、透き通った青い海、のどかなサトウキビ畑、美しい夕日、大きなガジュマルの木の下で腰掛けてみませんか？

いつかコロナが収束したら、是非HAPPY WORLD ISLAND 喜界島に訪れてみてください。そんな自然溢れる喜界島の魅力を観光大使館として誇りと愛着を持って発信出来たらと思っています。

遠く離れた千葉県に住んでいるからこそ、出来る恩返しもあるかもしれない。東京から遠い喜界島で発信するより、東京に近い千葉県から喜界島を発信することで多くの方に魅力ある喜界島を伝えることができると考えています。小さな当店ですが毎日喜界島を紹介する事で自分の心が温かくなり故郷がすぐ近くに感じる。お客様から『素敵な島ですね』『綺麗～』『行ってみたい～』そんな言葉を毎日に頂くと私の中に幸せが（HAPPY）が蓄積していきます。島で生まれ育った私だからこそ、伝えられる言葉もあるかもしれない。すぐ近くの方には届くかもしれない。まず、喜界島を知ってもらって喜界島の

商品を手にとってもらって喜界島をブランド化することを目指しています。

国内日本一の生産量を誇る島の特産白胡麻は香りがよく、ビタミンやミネラルを多く含み健康食品の代表です！また、島で多く見かけるパパイヤや花良治（けらじ）みかんが入った胡麻ドレッシング、黒糖、黒糖焼酎「喜界島」などの特産物は数々ありますが私の一番の自慢はザラメです。亡き父が生和糖業に勤める傍ら兼業農家でサトウキビを育てていました。私も子供のころ、サトウキビ畑の手伝いをしていたのでザラメは身近な食べ物でした。今敬意をもって『ダイヤモンドシュガー』と呼んでいます。キラキラと光る一粒一粒、スイーツのような甘さ、このザラメだけでお菓子として成立します。そんなザラメを毎年2t仕入れています。今年から仕入れ量が2tを超え自宅に保存出来なくなったため、新たにザラメ倉庫を建てる事になりました。今こうして商売に



ザラメの倉庫と筆者

喜界島の紹介



サーターアンダギー



シフォンケーキ



「お母さんのシフォンケーキ」の店



パパイヤ



アサギマタラ



島バナナ



巨大ガジュマル

ふるさと
喜界島大使館

代表者 友岡 照美
千葉県大網白里市南横川3098-18
TEL 080-1084-4269
mail : cake--terumi@i.softbank.jp
定休日 月曜日
営業時間 10:00~17:00

ふるさと喜界島大使館

繋げることができたのも喜界島への想いを起業することで形にし、ご先祖様に見守られているように感じます。このお店で喜界島の特産品（長命草、パパイヤ、島みかん、島バナナ、喜界島の塩）を使って美味しい食品を多くの方に届ける。更に知って頂き喜界島ブランドへの道に繋がりたいと思っています。

* (編集部より) ^{しゅんかんそうず} 俊寛僧都のことで、『平家物語』では、平家の転覆を図った『鹿ヶ谷の謀議』が発覚、平清盛の怒りを買って、喜界島に流された悲劇のヒーローとして描かれています。

しかし、当時の高僧はバイリンガル（日本語、中国語、サンスクリット語など）で語学に堪能でしたので、俊寛も島言葉にすぐに慣れ、『住めば都』とばかり、京都にはないコバルトブルーの海を眺めたり、潜水して鮮やかな色彩の魚たちの群舞を見たり、新鮮な海産物に舌鼓を打ったり—意外と余生を楽しんでいたのではないか—そんな風にも想像できます。その姿が民謡の歌詞となっています。

島での生活を楽しみ、京の貴人、高僧として人々の尊敬を集めた俊寛僧都のおだやかな表情の座像がソテツ林の中にあります。

ふるさと喜界島大使館 代表 友岡 照美



喜界島の全景

旅を詠む (五)

歌詠み人

たたらだに
 鈔谷君子の旅紀行



『北海の海』

北海道特有の花はもちろん、すべての花々が咲き誇る季節は絵物語のごとく、一時にやって来る。その一斉にやって来る春の歓びを倍加させることになるのだけれど、そして北海道だけが例外ではないが、足早にやってきて一面をまったく妥協のない自然の大きな力で覆って見せるのが北海道の冬である。海は凍り野を山も白一面に塗り込める冬は、人間の力ではいかんともしがたい自然の偉大さを知らされる。

廃船を容赦もあらず波は打つ
 北海の渚くらぐらと冬

刺網を氷雨はたたき港には
 人なく北のさびしさに佇つ

海の色は青黒く瀬戸内に生活しているものは、その一点でも北国の厳しさを知ることが出来る。

ひらひらと人はさみしく
 天の底を
 歩む澄みたる天を仰ぎて

横揺れをしてポイントを通過する
 北への旅はこれより単線

人は往々にして北志向をする。厳しいのに北国にロマンを感じるのは何故だろうか。北は突き射すような寒さだけど、それが旅の醍醐味と言ってしまえばそれだけだけど、見渡す限りという形容が旅心をくすぐるのであろう。

それに北海道の郷土料理のおいしいこと。鮭のたくさん入った石狩鍋、毛がにを箸もスプーンも使わずかぶりついて、口をとんがらせながらモリモリ食べる楽しさ。お上品に食べていては味を損ねそうなほどダイナミックな蟹鍋である。



地域ツアーの思い出 ～ミニツアー後の酒田～

今から9年前の平成25年5月19日(日)、20日(月)全国ふるさと連絡会議の「酒田ミニツアー」が実施されました。

この日は酒田の毎年の行事、「酒田祭り」の日で、それに合わせて開催したのです。

酒田祭りは、500年近く続く由緒ある盛大な祭りです。酒田大火が起きた昭和51年も、休止することなく続けられました。

祭り見学とともに、食の都と呼ばれる酒田のこの時期の美味しい食べ物も味わおうという思いもありました。

参加者は東京から17名、現地4名(ふるさと大使が先に帰省)の計21名でした。

当日、ご多忙にもかかわらず、副市長の丸山至さん(現市長)、観光部長、まちづくり推進課課長、観光課の阿部さんなどの出迎えを受けました。

我々の会を代表して甲斐秀治事務局長が、本日のツアーの主旨を述べ、副市長からは市の現状と課題

の説明があり、さらに未だに乗り入れのない新幹線の状況などの説明がありました。

「陸の孤島」と言われていた酒田市にも庄内空港に全日空の東京・大阪便がオープンいたしました。相変わらず、新幹線は通っておりません。現在、東京一庄内便は、ANAのドル箱路線と聞いております。

日本海沿岸東北自動車道・沿線市町村建設促進大会は、ここ2年コロナ禍で運動は中止となっております。

昔は酒田への帰省は東京から新潟を經由して酒田まで6時間もかかりました。

今は東京から新幹線で新潟から羽越本線特急いなほで酒田です(4時間)。新潟駅が在来線と新幹線が同一ホームになり、昔から見たらとても便利になりました。

最近ではコロナ禍で2年も帰省できず、とてもふるさとが恋しいです。それでも、最近嬉しいことがありました。酒田出身の十両12枚目の北の若が誕生した事です。

若い相撲取りですが夢があります。ふるさとも夢に向かって前進してもらいたいです。

皆様の応援をお願い致します。

酒田ふるさと観光大使 鴨川 キヨ

福島県浜通り視察ツアーの思い出

2019年4月6日(土)7日(日)、東日本大震災から8年を経た福島県浜通りの現状視察と桜の名所を巡る一泊二日のツアーが20名の参加で開催されました。

全国ふるさと大使連絡会議としては、2011年11月の三陸地方の被災地訪問に続き、二度目の被災地訪問となる今回は、新宿福島絆の会(福島県人会新宿支部)との共催で、同会会長で金山町観光大使でもある根本二郎氏の企画で実施されました。

今でも、バリケード封鎖されゴースタウンと化した帰宅困難地域の街並みや富岡町夜ノ森地区の満開の桜祭りの光景は脳に焼きついています。震災後初めて再開された桜祭りには避難している住民の方々や全国からの支援者が集い、多くの人の心が寄り添い、心のこもった素晴らしい祭りでした。ここでいただいた地元食材で作った昼のお弁当もおもてなしの気持ちが詰められていて、味わい深いものでした。

桜祭りの後は、浜通り地区8町村の現状を紹介する施設「ふたばいんふお」、廃炉関連施設「東京電力廃炉資料館」を視察しましたが、「ふたばいんふお」では浜通り地区の復興のために全国各地から若者が住み着いて働いている姿は、とても心強く思いました。

宿泊地の川内村では、立派な温泉施設「かわうちの湯」で入浴後、夕食では、遠藤雄幸村長、井出茂商工会長、大西俊枝特養ホーム事務長も加わり、地元の旨すぎて危ないどぶろくを味わいながら、まちづくりにかける熱い思いを拝聴しました。最重要課題として教育による人材育成を掲げていたのが印象的で、未来志向で明るい方々でとても頼もしく感じました。

夕食会の後は、どぶろくを傾けながらの震災や原発をテーマにフリートークとなりました。内容濃い話し合いだったと思うのですが、酔ってしまってほとんど覚えていないのが残念です。

2日目は、川内村の教育施設やいわなの郷を見学し、滝桜のある三春町へ。滝桜はまだ蕾の状態でした。次の行先予定地の花見山は車が渋滞して時間が全く読めないとのことで諦め、急遽、桜を求めて、栃木市の大平山に向かうことになりました。栃木市の商店街でランチを取り、車窓から大平山の満開の桜のトンネルを見物しました。

今年で東日本大震災から11年が経ちました。自然災害で2万人近い尊い命が失われたことに今さらながら驚愕するし、また福島での原発事故は今だに廃炉処理の見通しが立たず、「原子力緊急事態宣言」が解除されていない現実にも驚愕します。原発事故は人災であり、事故に学び、二度とこのような災害が起こらないことを願ってやみません。今後も引き続き、被災地の視察ツアーは継続して企画していただきたいと思います。

全国ふるさと大使連絡会議の視察ツアーは、毎回、地元の首長さんをはじめまちづくりの中心的人物のお話を聴くことができ、地元の美味しいお酒や食材を味わうことができ、とても楽しく学ぶことができ、しかもリーズナブルで、参加しないともったいないツアーです。皆さん、次のツアーでは是非一緒にいきましょう。

理事 伊藤 美智子

◆新会員のひと言◆

立目 浩文

この度、『全国ふるさと大使連絡会議』に入会をさせて頂きました、立目浩文と申します。

「新会員のひと言」をご依頼頂きましたので、自己紹介を兼ねてふるさとへの思い

などを述べさせて頂きます。私のふるさとは、高知県四万十市です。2015年4月10日所謂、平成の大合併により、旧中村市と旧西土佐村が合併して、四万十市が誕生しました。その当時は、地元の高校を卒業し上京しましたので、合併することやふるさとの名前が変わることに対して、ただ単に時代の流れだなと理解し、然程寂しいという思いは湧いて来ませんでした。上京して28年40歳も半ば過ぎた頃、東京でふるさとに接することは何かないかと探していたら、母校の高知県立中村高等学校の同窓会東京支部があることが分かりました。そして、2014年10月に行われた同窓会に初参加しました。そこでご紹介を受け



たのが、中野正三氏です。そして、中野正三氏とお付き合いをさせて頂く内に、様々なふるさとの会をご紹介頂き、参加させて頂くことが出来るようになりました。『全国ふるさと大使連絡会議』への入会も中野正三氏が推薦してくれたからです。私の主たる活動は、高知県の西部に位置する旧幡多地区の出身者が中心に運営している「土佐幡多の会」です。郷土の泰平、併せて郷土の発展に資することを目的に活動しております。高知県の人口減少もどんどん進み、ふるさとに帰省する度に街が寂れて行く様を目の当たりにすると、「どうにかせな—いかんちや」との思いが強くなって参りました。ただ、個々の力は微々たるもの、『全国ふるさと大使連絡会議』に加えて頂いたことにより、他の地域の現状や、また町おこしの成功例、更に様々な情報を共有させて頂くことにより、相互の発展に寄与出来ればと思っております。どうかご指導ご鞭撻のほど、宜しくお願い致します。

土佐幡多の会 副会長 ※4月一般財団法人化予定
高知県立中村高校同窓会東京支部 支部長
関東高知県人会 幹事/東京黒潮会 会員

事務局より

新しい事業年度(2022年)に入りました。
今年度こそは全国ふるさと大使連絡会議としての活動が活発にできるようにと願ってやみません。

コロナがおとなしくしてくれるものと想定して、
コロナ以前の活動をより活発に再開するべく、事務局として積極的取り組みさせて頂く覚悟をしております。

どうか多くの皆さまのご参加、ご協賛を賜りますようお願い申し上げます。

私のふるさと大分県が素晴らしい事になっています。2015年頃、知事が健康寿命日本一大分県を発信され、健康づくり支援課などが減塩や運動について健康寿命を延ばす対策に取り組まれた結果、なんと、男性が健康寿命県別ランキング2021で1位(女性は4位)になったのです。

前回2019年の調査では、男性36位(71.54歳)女性12位(75.38歳)だったのが、2021年では、男性1位(73.72歳)女性4位(76.60歳)に急上昇しているのです。

健康寿命というのは、人の手を借りなければ生活できなくなる年齢を言います。健康寿命日本一を唱え、それに伴う対策を広報したことで、住民の健康意識が向上した結果、110万人以上の住民の健康意識が高まった結果ではないかと感じています。

これは、多くの会員様がおられるわが会の皆様の健康増進に何かヒントがあるのでないだろうかと感じ、この方面に詳しい方にお声掛けて情報発信などできたらと事務局長は夢想しています。

事務局長 甲斐功一

新事業年度になりました。本年度の会費納入をお願い申し上げます。

全国ふるさと大使連絡会議の概要

- 設立年月 1996年8月8日
- 目的 各地において制度化され、委嘱されている「ふるさと大使」および「委嘱者」相互の情報交換・交流・連携を図り、全国のふるさと・地域の活性化に貢献することを目的とし、その達成のために各種の事業を行うものとする
- 会員の資格
 - ①ふるさと大使
 - ②ふるさと大使委嘱団体関係者
 - ③ふるさとを愛する人々等
- 会費 所定の会費(3,000円以上、団体会員は10,000円)もしくは相応の貢献寄与をしなければならない

2021年3月末現在の会員構成

大使会員	113名
団体会員	11団体
一般会員	155名
合計	279名

確認された大使制度

(2019年10月現在)

県知事が委嘱	44団体	90制度
市長村長が委嘱	630団体	731制度
諸団体等の長が委嘱	147団体	150制度
合計	821団体	971制度

年会費納入のお願い

個人会員—3,000円 特別会員—5,000円 団体会員—10,000円

以下の方法でご送金賜りますようお願い申し上げます。

*郵便振込み 店名 038 普通 7211051 口座名 全国ふるさと大使連絡会議

*銀行振込み 三菱UFJ銀行 亀戸支店 普通 0173146

口座名 全国ふるさと大使連絡会議

*郵便振替 口座番号 00190-7-149658 口座名 全国ふるさと大使連絡会議

(注) 多くの方に郵便振替でお振込みを頂いていますが1月17日の料金改定で、現金での手続きですと振込料に110円加算されます。郵貯口座での、振り込みなら加算されません。郵貯のATMから手続きできますのでご活用いただきますようお願い申し上げます。

編集後記

民俗学研究の権威、柳田國男氏は方言について「地方にいい言葉が沢山あり、特に形容詞とか動詞つまり用言に、東京に知られていないいい言葉がある。」と述べておられる。

まさに、中平高知新聞社長との対談に出てきた『いのぐ』、『買(こ)うちよく』などの土佐弁が、その典型で力強く心に響くいい言葉だと思いました。

友岡さんにご紹介いただいた喜界島も「独自の伝統文化や方言などを大切に伝えています」とHAPPY WORLD ISLAND喜界島のパンフレットにあるように豊かな方言に恵まれています。

このような歴史と生活に根差した方言が各地に残っていることが大変に心強く、その地方の多様性が平成以降停滞の著しいわが国再生の1つの橋頭保になると思われまます。

今号も鉦谷さんから恒例の連載『旅を詠む』をいただきました。そこで詠われている『くらぐら』とした「北海の海」など冬の海の恐ろしさと豊かさを詩情豊かに伝えていただきました。丁度、喜界島のコバルトブルーの海の明るさと対照的で、これもわが国の地方の多様性の典型例のように思われます。

また、25周年記念連載の一環として、鴨川副代表から「ミニツアー後の酒田」と題して酒田ツアーの思い出を、伊藤理事から「福島県浜通りツアーの思い出」を報告していただきました。その文中にもありますが、コロナ禍も一段落しましたので、こうした地域ツアーを復活させていきたいと考えています。

さらに、一時中断していました夏季・新年交流会の再開、昨年2年ぶりに復活した全国大会の引き続いての開催を図っていきたく考えていますので、よろしく願いいたします。

コロナ禍が一段落したことで、各地で新しい地域おこしの取り組みが進むことと思われまます。次号以降も地域おこしの新しい動きをお伝えしていきたいと思っています。

会員のひろば ご投稿のお願い

かわら版の紙面を豊かにするために、地域おこしに関する新しい動きや、ご自身のご活躍の様子など積極的なご投稿をお願いします

(一応の目安は、1,700字と写真2枚でかわら版1ページ、850字と写真1枚でかわら版の半ページです)

ふるさと大使かわら版 2022年4月9日—令和4年春季号— (通巻102号)

◇発行：全国ふるさと大使連絡会議 (代表=平谷英明) ◇編集責任者：平谷 英明

◇事務局：〒136-0071 東京都江東区亀戸7-65-20 全国ふるさと大使連絡会議

TEL：03-3684-0488 FAX：03-3684-6800 Email：furusatotaishi@gotochi.biz

URL http://www.furusatotaishi.com

